

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：11201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22720208

研究課題名(和文) 海外語学研修後の効果持続性：「異文化的」体験世代の増加と言語教育の課題

研究課題名(英文) The increase of students with 'cross-cultural' 'study-abroad' experience: Implications for language education

研究代表者

小林 葉子 (Kobayashi, Yoko)

岩手大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：00352534

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円、(間接経費) 780,000円

研究成果の概要(和文)：研究開始当初、日本の若者は中国人や韓国人の若者などと比べ、海外留学や海外勤務に消極的になっている、という「内向き志向」について盛んに報道・議論されていた。その一方で、主に女子学生の間では、短期海外語学研修は大変人気があり、どの大学機関でもこうした短期「体験」型プログラムを提供している。本研究は国際競争としての外国語教育政策という観点から、日本人学生の「異文化体験」観と教育界・産業界の「グローバル人材」育成政策の背景について研究を行った。具体的には、海外語学学校での調査と海外留学関係の記事と政策に関する資料収集を行った。

研究成果の概要(英文)：The present study is stimulated by recent scholarly and media discussion on Japanese young people's unwillingness to study or work abroad, compared with other Asian counterparts. Attending to many Japanese young women in secondary and postsecondary education who equate study-abroad experience with global career possibilities, the study examines young people's notion of cross-cultural experience in terms of gender, nationality, and language ideology. Numerical and qualitative data are collected from study-abroad students (primary data) and media databases (secondary data).

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：異文化コミュニケーション

様式 C - 19、F - 19、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

- (1) 研究開始当初、日本の若者が中国人や韓国人の若者と比べ、「内向き志向」である、という議論が盛んに報道・議論されていた。その根拠とされたデータは、日本の若者は他のアジアの若者と比べ、英語圏への留学(希望者)生と海外勤務希望者が減り続けている、というものであった。背景には、日本を代表する大企業が韓国などの企業との競争に負けている、という危機感があり、「グローバル人材」論が教育界、産業界、政界、メディアにおいて過熱しつつある時期であった。
- (2) こうした流れの中、研究者たちは語学研修の成果(留学前・留学中・留学後)について検証を続けた。しかしながら、研究の多くが英語圏での数週間の語学研修現場からデータを収集したものであり、上記の社会的背景の考察に貢献するには大きな制約があった。さらに、研究者の多くが英語教育に関わっているため、「外国語 = 英語」、「英語 = グローバル言語」という昔からの意識から脱却できないままであった。さらに、同様の理由から、大学など教育機関に所属している研究者の注目は「現役学生」に絞られがちであり、そうした学生が卒業し社会人として働き始めた後のことについてはほとんど注意が払われない状況が続いている。
- (3) 以下(4の研究の成果)にて詳しく述べるが、本研究ではこうした状況を踏まえ、日本の若者が経験する海外語学研修を現地調査するだけでなく、彼ら(学生・新社会人)を取り巻く社会的環境と「グローバル社会」イデオロギーを明らかにすることを目指した。

2. 研究の目的

- (1) 研究テーマ(1): 日本の若者の「内向き志向」論と中国や韓国の学生たちの積極性(論)を念頭に、日本の若者が自主的に(個人的に)どの

ように動機から英語圏語学学校で学んでいるのか、という点を追究した。

- (2) 研究テーマ(2): 研究開始当初、韓国人の母親たちが子供の将来のため、英語圏や準英語圏に長期同伴留学している現象に着目した海外研究が次々と発表されていた。そうした流れは日本国内の「若者の内向き志向」論とは明らかに対照的であった。こうした状況を踏まえ、準英語圏諸国の語学学校に注目し、新しい形態の「語学留学生」が日本人学生の中からも生まれているのかどうか、日本社会に根強い「(英語)ネイティブ」志向は変化しつつあるのか、という点を追究した。

- (3) 研究テーマ(3):

国内のメディア、教育政策、企業内政策などを概観すると、「グローバル人材」や「日本人としてのアイデンティティ」などの用語が多用されていることがわかる。本研究ではこうした言説をデータとして、「グローバル人材」とは誰を指しているのか、という点を追究した。

さらに、ビジネス(マン)雑誌と女性雑誌に掲載され(続けてい)る「外国語学習」意義に関する記事をデータとし、どのような外国語が取り上げられているのか、どういう理由でその外国語を誰が学習すべきだと説いているのか、誰が「専門家」としてその根拠を語っているのか、などを追究した。

- (4) 研究テーマ(4): 研究テーマ(3)と関連するが、文科省、大学サイト、ビジネス(マン)雑誌を概観すると、中国の台頭を念頭に置いた記事や文言が急増していることがわかる。本研究では、中国(語)の台頭がどのように、日本の外国語教育現場(英語以外の外国語教育も含む)に影響を及ぼしているのか、追究した。

3. 研究方法

- (1) 研究テーマ(1): 現地調査、現地文献調査
- (2) 研究テーマ(2): 現地・国内調査、文献調査
- (3) 研究テーマ(3): 文献調査、言説分析
- (4) 研究テーマ(4): 文献調査、言説分析

4. 研究の成果

(1) 研究テーマ(1)

Kobayashi, 2010

英語教育関係者と学生たちの多くは英語圏への留学や「英語ネイティブ」との交流に対する思い入れが強い。しかしながら、現地で接する「英語ネイティブ」は現地スタッフかホームステイ家族のみであり、ほとんどの「異文化間コミュニケーション」は他の国からの留学生たちとの交流である。ただし、その交流さえなく、同郷人同士だけで過ごした、という例は日本人に限ったことではない。

日本人大学生の中で、「英語圏に行ったのに学校ではアジア人ばかりだった」「戦争のことで責められた」など不満を口にするものもいるが、その一方で、英語圏でのアジア人学生との交流がきっかけで、アジアに興味を持った、という例も複数見られた。日本企業の取引先や商談相手の多くは、アジア系学生の出身国にある企業である。「グローバル教育」と「英語圏への語学留学」を同一視し続けている英語教育の意識改革そのものが遅れており、その意識が学生たちに影響を及ぼしている可能性はある。

(2) 研究テーマ(2)

Kobayashi, 2011b ; Kobayashi, 2012

本研究ではシンガポールやマレーシアの英語語学学校に個人留学した(元)学生や(現)社会人のうち、日本人男性に焦点を当て、現地や東京で調査を行った。彼らは、旅行感覚で語学研修に参加している(よう

に見える)日本人女子学生に対し厳しい見方をしていた(例:「女子学生にとって英語学習はお遊びだから彼女たちはOL・非正規で十分 それに対してこっち・男性は大変なのだ」)。

彼らからのデータ収集が重要である理由は、多くの研究は集団語学研修に参加する現役学生(大半は女子学生)からデータを収集しており、現地の同じ語学学校にきている企業海外研修参加者がほとんど男性である、という事実を看過しているためである。

多くの大学が、語学研修=大学のグローバル戦略、という位置づけを掲げているが、その研修に参加している学生たち(女子学生)が卒業後、どのようなグローバル人材になる機会があるのかわからないのか、という点には目をつむっているのが現状である。

(3) 研究テーマ(3)

Kobayashi, 2011a; Kobayashi, 2013a; Kobayashi (採択済学術論文), 'Ideological discourses about learning Chinese in pro-English', *International Journal of Applied Linguistics* (published by John Wiley & Sons Ltd)

「グローバル人材」とはだれを指すのか、という点を外国語教育学術論文、政府文書、企業文書、ビジネス雑誌など複数の文献をデータとしながら調査をした。大学教育界と産業界の隔たりは明白であり、大学の語学研修に参加する多くの女子学生(英語科所属)は、「グローバル人材」育成のための企業内研修からは排除されている。大学が担っている役割は、(女子)学生たちがエントリーシートに書くために必要な「異文化体験・海外体験」(ネタ)を提供することといえる。また、ビジネス雑誌に登場する大学教員(日本人・白人英語ネイティブ)の役割は「英会話」教師であり、それ

以上のものはなかった。

女性雑誌に見られるパターンはビジネス雑誌とは異質なものであり、「楽しいおケイコ・女磨き」や「副業のための学習」などであった。こうした言説の再生産(繰り返し)は明らかであり、読者への刷り込み効果は相当なものがあると思われる。対照的に、ビジネス(マン)雑誌では、前述の研究テーマ2でまとめた男性語学研修者からの声と同様に、「男性はグローバル社会の中でグローバル言語が必要で大変なのだ」という論調が主流であり、「女性」の存在が確認できたのは「英会話」講師としての同時通訳者程度であった。

(4) 研究テーマ(4)の成果：

Kobayashi, 2011c; Kobayashi, 2013b

政府や企業の資料に「アジア」や「中国(語)」重視の姿勢が明記されるようになり、私立大学などを中心に、英語と中国語の2本立ての外国語教育を開始する流れが出てきた。こうした中でなおざりにされている議論が、「グローバル言語」とは見なされない「周辺」言語(ヨーロッパ言語)はどうするのか、また、「グローバル人材」とは見なされない「周辺」学生(「一般職」希望の女子学生)はどうするのか、という点である。

世界における日本の存在感の低下はあちこちで指摘されているが、こうした時代の流れは海外の応用言語学研究にも見て取ることができる。つまり、世界的な中国語学習人気や巨大な「中国(人)英語学習(者)」市場に関する研究は爆発的に増えている。その背景には、外国語教育市場の拡大がある(例：孔子学院など世界の中国語教育市場、中国本土の英語教育市場を狙う英語教育産業、中国人留学生をターゲットにする英語圏などの教育機関、など)。以前は、アジアで唯一の先進国として、日

本の英語(外国語)教育研究の動向に注目する研究者たちは多かった。ただその論調に問題がなかったわけではなく、「日本語・日本社会は特殊なので、日本人は英語がいつまでも下手なのだ」といった「日本人論」説が繰り返されていた。現在はそうした議論自体も下火となり、国際レベルでの外国語教育研究においては、中国や韓国など、自国の学生を海外に送り出すことにも海外から留学生を呼び込むことにも積極的な国に関する研究が主流となっている。今後、海外においては、中国や韓国などの外国語教育「先進国」との比較対象という観点から、日本の外国語教育事情が研究・発表されていく可能性は高い。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計12件)

Kobayashi, Yoko. 2013a. Global English capital and the domestic economy: the case of Japan from the 1970s to early 2012 *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, (published by Routledge/Taylor & Francis Ltd.), 34 (1), 1-13. [査読あり]

DOI: 10.1080/01434632.2012.712134

Kobayashi, Yoko. 2013b. Europe vs. Asia: foreign language education other than English in Japan's higher education. *Higher Education* (published by Springer), 66 (3), 269-281. [査読あり]

DOI: 10.1007/s10734-012-9603-7

Kobayashi, Yoko. 2011a. Global Englishes and the discourse on Japaneseness *Journal of Intercultural Studies* (published by Routledge/Taylor & Francis Ltd.), 32, 1, pp. 1-14 [査読あり]

DOI: 10.1080/07256868.2010.525326

Kobayashi, Yoko. 2011b. Expanding-circle students learning 'standard English' in the outer-circle Asia *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 32, 3 (published by Routledge/Taylor & Francis), pp. 235-248 [査読あり]
DOI: 10.1080/01434632.2010.536239

Kobayashi, Yoko. 2011c. Applied linguistics research on Asianness *Applied Linguistics*, 32, 5 (published by Oxford University press), pp. 566-571 [査読あり]
URL: <http://apliij.oxfordjournals.org/content/32/5/566.abstract>

Kobayashi, Yoko. 2010. Discriminatory attitudes toward intercultural communication in domestic and overseas contexts *Higher Education* (published by Springer), 59, 3, pp. 323-333 [査読あり]
DOI: 10.1007/s10734-009-9250-9

[学会発表] (計 4 件)

小林 葉子 「「ビジネス言語の中国語」と「韓流の韓国語」—日本社会の英語イデオロギーへの影響—」 2012年9月2日 第30回社会言語科学会研究大会(東北大学)

小林 葉子 「アジア新時代における言語イデオロギー」 2011年12月3日 第12回日本コミュニケーション学会東北支部研究大会(新潟市)

Kobayashi, Yoko. Working adults' (un)willingness to study L2: preliminary findings and research challenges 2011年4月19日 The 46th RELC International Seminar, SEAMEO Regional Language Centre (シンガポール)

Kobayashi, Yoko. Sojourners from the expanding circle studying 'standard English' in the outer circle: a preliminary study 2010年7月25日 The 16th Annual Conference of the International Association for World Englishes (IAWE) (バンクーバー、カナダ)

[その他]

researchmap

<http://researchmap.jp/read0083744/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林 葉子 (KOBAYASHI, Yoko)

岩手大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号 : 00352534

